みんなの広場

はっらつ ところ 野老っ子

「両親を喜ばせたい」思い

菅原　良明さん
（北岩岡在住）

猛暑の夏、168㎝の小柄な高校球児は、マウンドで堂々たるピッチングを披露していました。

それは、135㌔の直球と得意のスライダーを武器に『甲子園まであと1勝！』のところまで登り詰めた左腕、所沢商業高校野球部エースの菅原さんです。

4歳のころからボールを握っていた少年時代。お父さんをはじめお兄さんたち全員が野球をやっていたので、物心ついたときから野球漬けの日々でした。

実は、菅原家は7男6女の15人家族。仲が良いだけではなく、お互いのことを何でも知っている大家族です。そのお陰で、7男の菅原さんは、壁にぶつかったときも、家族の励ましによって乗り越えることができたそうです。

そんなチームワークの良さは、高校野球にも通じるものがありました。「勝つためには助け合うことが必要です。1人の力では何もできません」と語る菅原さんには、常にチームというものを大事に考えている姿がうかがえます。

決勝戦で途中降板した菅原さんは、決してあきらめることはなく、「勝っている場面で投げさせてやりたい。自分が打って逆転する」という前向きな気持ちを胸に、ライトの守備から後輩のピッチングを見守っていました。残念ながら負けはしましたが、後輩には来年の期待を込めてエールを送り、同級生たちとは3年間の思いを「ありがとう」という言葉で締めくくりました。

「負けて悔いはないは嘘になるが、最後まで戦えたことがうれしかった」と悔しさの中にも、満足げな表情を見せてくれました。監督さんも「所沢商業の歴史に名前を残した選手です」と彼の活躍をたたえていました。野球チームに入った小学1年生のときから「自分が活躍することで、両親を喜ばせたい」と抱いていた思いも、今回の活躍につながったのではないでしょうか。

卒業後は市内の企業に就職希望で、軟式野球で頂点を目指しています。「国体に出場したい」という言葉に活躍が期待されます。常に前向きな菅原さんの野球人生は、これからも続きます。

気迫のこもったピッチング

▲困っている方への手助けをする「駅ボランティア」。体験会では、その必要性を再認識しました。
7月31日㈯～8月2日㈪／航空公園駅　ほか

TOKOROZAWA ものしり ウォーキング 54

山口・岩崎の能獅子舞

宇佐美氏の墓（瑞岩寺）

山口の瑞岩寺では、毎年10月の第2土曜日に、「獅子舞」が行われます。市内で唯一の獅子舞で、歴史も古く、市の無形文化財にも指定されています。

この獅子舞は、正式には岩崎の能獅子舞といいます。山口地区の岩崎地域の人たちによって舞われ、演奏の中に能という楽器が使われるのが特徴です。

能を鳴らすのは、花笠をかぶった3人のササラッコと呼ばれる人たちです。登場する獅子は、牝獅子と大獅子・中獅子の3匹で、獅子1匹に1人が入り、太鼓を叩きながら舞います。

このほか、場を清める棒使いや、獅子を先導する蝿追い、六尺棒とほら貝を持つ山伏なども登場します。また数名の笛の奏者が獅子の太鼓の音と呼応して舞を盛り上げます。

かつては、すべて成人男子で構成されていたそうですが、今日ではササラッコと棒使いは、小学生が演じています。

この獅子舞の起源は、江戸時代初期にさかのぼります。当時の岩崎村の領主である旗本宇佐美助右衛門長元が、大坂冬の陣に参戦した帰途、京都で獅子頭を求め、岩崎に帰って村の青年たちに伝えたのが始まりといいます。

以来今日に伝えられましたが、明治期と第2次世界大戦中に一時途絶えていました。終戦直後に復活し、昭和44年に保存会が結成されました。はじめは10月の十三夜に行っていたといいます。もっとも、江戸時代には8月15日に行われていました。

獅子舞は正午に始まります。演者たち一行は、まず岩崎弁財天（市立山口保育園隣）へお参りに行き、その後瑞岩寺に戻って舞います。

通して舞うと2時間を要するといわれていますが、今日ではそれを40分くらいに短縮し、時間を空けて2回行っています。

獅子舞のストーリーそのものは、1匹の牝獅子をめぐる大獅子と中獅子の戦いです。這うような姿勢や、跳ね上がるなどの獅子の動きが戦いの様子を表し、それが最大の見せ場だといいます。勇壮な舞は、必見の伝統芸能といえるでしょう。

岩崎の能獅子舞

街かど ズームイン

▲スポーツの秋です。普段からのちょっとした運動が日々の健康維持に…。「手軽に健やか体操教室Ⅱ」。
9月7日㈫～／市民体育館

▶皆さんからの「街かどズームイン」情報を募集▶採用者には事前に連絡します▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内で▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「私の金メダル」▶日本選手の活躍でオリンピックでは金メダルのラッシュ！▶皆さんにも誰にも負けない金メダルがあるはず▶あなたの金メダル話をお寄せください▶締め切りは10月6日㈬必着▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1-1-1所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係

▲ゆかた姿に清涼さを感じます。暑い夏の快いひとときを。「ダイアプラン夏の市民まつり盆踊り大会」。
8月21日㈯／西武ドーム

リサイクルふれあい館「エコロ」不用品ガイド

●**譲ります**　▷ソファー▷女性用ゆかた（150㎝）▷パイプハンガー▷座卓▷家具調こたつ▷ハイローチェア▷学習机▷冷蔵庫▷フットバス▷編み機

●**求めます**　▷踊り用扇子▷鍵盤ハーモニカ▷水彩絵の具セット▷自転車（12・14・15・16・22・24インチ）▷卓球台▷ワープロ▷卓上ミシン▷電子ピアノ▷電子オルガン

◎登録翌月の初旬に内容を館内に展示しています。

受付方法　リサイクルふれあい館へお問い合わせください。

休館日　月曜日、祝休日

申し込み・問い合わせ　リサイクルふれあい館（☎2994-5374・FAX2994-1118）

とことこ 町内会めぐり

【南永井地区自治会】
～花と緑のオアシスづくりの推進～

南永井地区は、24自治会で構成されている柳瀬地区の北部に位置し、大岾・上組・中組・下組の4自治会、250世帯の会員から成り、各自治会が自主的に活動しています。

南永井地区は純農村地帯で、市内でも野菜の産地として有名な地域です。また、関越自動車道・所沢インターチェンジがあるため、最近はオリンピック射撃場跡を中心に流通関係の事業所が急増しています。

南永井中央には地区の守り神である八幡神社があり、川越いもで有名なさつまいもの始作地としての石碑が建てられています。

また、下組自治会を中心に長い歴史を持つ「神田流南永井囃子連」は、地元南永井をはじめ、ほかの地区のさまざまな行事に参加しています。特に、南永井地区盆踊り大会では積極的に参加し、大会を盛り上げています。

花と緑のオアシスづくり

当自治会の特色ある活動としては、平成11年度から市の指定を受け、6年間継続している「花と緑のオアシスづくり推進事業」があります。南永井道路延べ3.5㎞に渡り、両側にサルビアの苗の植え付けや手入れを行い、一部、日比田地区自治会の協力をいただきながら、道路を花いっぱいに咲かせています。

こうした地域の取り組みは、地域住民をはじめ、道路を通行する人たちの目を和ませ、喜ばれています。

誰でもエッセイ

テーマ　秋の夜長

遠い昔の秋の思い出

寿町・浅野　洋次

さまざまの　虫鳴く夜と　なりにけり
（正岡子規）

「虫の声」というと、あの『秋の夜長を鳴きとおす』の唱歌『虫の声』のメロディーが、おのずと浮かんできます。小学生のころでしたか、「夜長」という言葉を知らず、「秋の夜中」と、臆面もなくロずさんでいたことを思い出します。

耳学問が先行する少年時代。「灯火親しむ」を「灯下親しむ」と思い、数少ない街灯の下に立ったことも…。極めつけは、「天高く馬肥ゆ」を「天高く馬越ゆ」と思い、天かける天馬の勇姿を、懸命に空のかなたに求めたこともありました。

秋の夜長のひとときに、遠い昔の秋の思い出にふけっています。

静かな秋の夜に

若狭・大澤　美江

私はこたつの中にもぐり、母の繕い物をする手元を見ていた。母は手を動かしながら、私の話をニコニコと聞いていた。学校の話、友人の話、意地悪されたこと、先生の言ったことなど。1日の出来事をすべて話し、心の中を空っぽにした。

母は言った。「どんな人にもね、自分からよくしてあげるの。そうすると、悪い人は1人もいなくなるのよ。そして、困っている人には手を貸してあげてね」。

テレビもなく、時に聴こえなくなるラジオしかない中で、私は、よく母と話をした。田舎がある岩手の夜は、本当に静かで空気が澄んでいた。近所でもちをついていると、「あっ、○○ちゃんのところ、おもちつきね」と、離れた家の音まで耳に届いた。風のさやけさも、葉っぱの揺れる音も…。虫の声は大合唱だった。

宿題をし、友人に借りた本を読む。まだ子どもの私だったけれど、母の注いだお茶を口に含ませながら、この静かな秋の夜に、幸せを感じていたものだった。

秋の雨

宮本町・竹内　和枝

昨日までの暑さは遠ざかり、雨の町を通り過ぎる車の音を聴きながら、所沢市の文化祭へ出かけた。その優雅な舞台に、私は堪能させていただいた。隣席には俳句を通じた親しい友達がいた。帰りに、フラワーデザインの方たちが手作りした「秋の七草」の花籠をいただいた。1人になってゆっくり眺め、花や葉の細かい作業を、よくできるものだと感心した。

秋の夜長は句会誌をひもときながら、しのぎやすくなる季節を感じつつ、健康でいるためには、いかに生きるべきかを考える。読書、運動、秋の味覚も工夫して取り入れてみたい。澄んだ青空のもとでの一人旅もよい。手提げかばんの中にある健康のお守り袋に鈴を付け、「気を付けよ」と自分に呼びかけている。

秋の始まりは、夏の猛暑で疲れた体を十分休ませ、心身をリフレッシュしたい。

秋の本との出会い

日比田・見沢　智子

秋の夜といえば、中学生のときにふとんの中で『野菊の墓』を読んだことを思い出す。どんどん引き込まれ、政夫が墓の前で『両膝と両手を地べたへ突いてしまった』というところで、抑えていた感情がわき出て涙があふれてとまらなかった。姉が隣であきれていたっけ…。

本を読むときは、疲れると寝転んで本を上にかざしたり、横向きで本の片方を立ててみたり。夢中になると、それでも読むのをやめなかったものだ。

小学1年生の娘のそこまで熱中する姿を、まだ見たことはない。「これからいっぱい出会えるといいね！少しだけ夜ふかし許してあげるから」。

夜長に想う

林・池田　重男

今年の夏は、猛烈な暑さが続いた。立秋が過ぎて、涼しさが身にしみるころになると、秋の夜長を感じる季節。

8月中旬からのアテネオリンピックは、時間の差異による真夜中の放映だったが、連日の日本選手の活躍に、目を離すことのできない場面が展開された。

スポーツが終わったあとは、一時、法話の「禅定」という精神も経験してみては…。禅定とは、静かに深くものを考えるということ。

祖母との想い出

小手指町・長沼　典子

小学生時代、いじめられっ子だった私は、ぐずってしまい集団登校ができなかった。ひと足遅れて、毎朝私の手を引き学校へ送り届けた祖母は、「うちの典子をいじめないで！」と、教室のわんぱく坊主たちに向かって大声で言い残して帰って行った。行為の善し悪しは別として、半世紀経った今でも、その真剣な面差しは眼に焼きついたままだ。

秋風を感じ始めると無性に人恋しくなる。小学生の孫たちを持つ今、初孫の私を何事からも守ろうと意気込んでくれていた祖母への思慕が、沸々とわいてくる。

今年の夜長は、祖母との想い出にじっくり浸り、記録ノートを綴ってみようか。生前の恩に感謝し、冥福を祈りつつ…。

―次回のテーマは「私の金メダル」です―